第３３回 武器を捨て、腕力にものを言わせず、話し合う子ども

テロを受けたからといって空爆で報復してはいけない、と今のうちに言っておく。なぜなら報復によってテロの問題は解決しないからだ。

テロは悪いことに決まっている。爆弾によって人を殺傷し町を破壊することで力を示そうとする。それが、いいことの訳がない。だから、報復はできない。報復と言って空爆してしまえばテロリストと同じ悪いことをしたのであり、テロリストと同レベルになり、テロを悪いといえなくなる。

「対テロ戦争」「テロとの戦い」などというスローガンに扇動されてはいけない。二〇〇一年九月一一日以来、そのスローガンを掲げた世界戦略のもと、テロリストが増えた。「対テロ戦争」を始めて十五年、子どもたちの将来は着実に危うくなった。今またわれわれが「報復」という同じ道を辿る決断をして、子どもたちのさらなる未来をも暗くしてはならない。

「やられたらやり返せ！」感情的にはわかる。しかしそこをふみとどまらなければいけない。それに、感情的になってすることなど、普段でもうまくいかない。パニックになると血迷うので平時こそしっかり考えなければならない。報復が許されるなら「テロリスト」も許される。彼らも報復としてテロをしていることが多いからである。

かけがえのない人を殺されたなら、そいつを殺さないと気が済まないという感情を人はもつものだ。しかし、その人が「かけがえがない」ということは、代理不可能ということである。親しい人でも代わりはできない。殺されたのはその人であって、あなたではない。だから、〝その人に代わって〟と思った時点で「かけがえがない」をわかっていない。わかってないから、他のかけがえがないものを奪おうとする。報復が許されるとしたら、殺された本人が殺した本人を殺す場合のみであろう。そんなことは、あり得ない。

2015年9月17日の写真。これは過去ではな

私たちはもう知っている。「テロとの戦い」から帰った多くの米兵が自殺に追い込まれていることを。帰還兵の中から軍事力で他国に侵攻するのは間違いだと声を上げる人々がいることを。フランスのテロ後、妻が殺されても報復をのぞまなかった夫を（裏面参照）。

人はそういう決断ができる。私たちもそういう決断をする人でありたい。

軍事力でテロはなくせない。それなら代案を出せ。簡単には出せない。しかし、武力に頼らないで平和を維持している実例がある以上、可能性はある。それを現実にする決断を国民がするかどうかにかかっている。

あってほしくないことだが、もし日本にテロが起きたら、世の中はどうなるか。そのパニックに乗じて、暴力で法案を通してしまう政府は待ってましたとばかり、暴力的で危険な法案を通してしまうのであろう。

だから今、園児たちは人の話を聞き、自分の意見を言う話し合いの経験を積んでいるのである。注意すべきは「みんな」がそう言っているからと決定にしてしまうこと。少数派の意見にも耳を傾け数の暴力が振るわれないように、先生たちは配慮するのである。そうした配慮や環境設定をするのが、あんな恥ずべき代表を選んでしまっている大人の責務である。

わが国でテロが起きてしまったら、そのショックからテロリストを軍事力で殲滅しろという気運が高まり、あるいはマスコミなどを利用して高められ、「対テロ戦争」賛成の空気が満ちるであろう。その時、冒頭のように言うだけで、「おまえはテロに味方するのか」「非国民」と非難されることは想像に難くない（ぼくの想像が荒唐無稽な妄想であることを願う）。

だから、テロが起きないうちにはっきりと確かめて、たくさんの人とこの考えを共有しておきたい。

テロに軍事力で報復してはいけない。

「あなたたちの願い通りに憎しみを抱いたりはしません」
11 月 13 日の同時多発テロで妻を亡くしたアントワーヌ・レイリスさんが Facebook で語った。

あなたたちは私に憎しみを抱かせることはできません。

13 日の夜、あなたたちは特別な人の命を奪いました ——私が生涯をかけて愛する人であり、私の息子の母親です。しかしあなたたちは私に憎しみを抱かせることはできません。私はあなたたちが何者かを知らないし、知りたいとも思いません。あなたたちは魂を失った人間です。殺人をもいとわないほどにあなたたちが敬っている神が自分の姿に似せて人間を創造したのだとしたら、私の妻の体に打ち込まれた全ての銃弾は、神の心を傷つけたでしょう。
私はあなたたちの願い通りに憎しみを抱いたりはしません。憎悪に怒りで応じれば、今のあなたたちのように無知の犠牲者になるだけです。あなたたちは私が恐れを抱き、同胞に不審な気持ちを持ち、安全に生きるために自由を失うことを望んでいる。あなたたちの負けです。
今朝、私は彼女に会いました。この数日、ずっと待ち望んでいた再会です。金曜日の夜に外出した時と同じように彼女は美しかった。12 年前に私を夢中にさせた時と同じように美しかった。もちろん私は痛みに打ちのめされています。その点については、あなたたちは少しは勝利をおさめたのかもしれない。しかし痛みは長くは続きません。彼女はこれからも私たちと共に生き続けます。そして私達は再び自由に愛しあえる楽園で会えるのです。そこは、あなたたちが入れない場所です。
私と息子は二人きりですが世界中のすべての軍隊よりも強い。これ以上あなたたちのために使う時間はありません。メルヴィルが昼寝から目を覚ましたので、彼のところに行きます。彼は生後 17 カ月。普段通り食事をし、私と遊び、そして幸せで自由な人生を過ごすことで、あなたたちに勝利するでしょう。彼もあなたたちに憎しみ抱くことはありませんから。

堀田 佳男　2014 年 11 月 18 日（火）日経ビジネス

1 日 22 人が自殺している—。
11 月 11 日の米ベテランズデー（復員軍人の日）に合わせて、反戦イラク帰還兵の会が発表した復員軍人における自殺者数である。
「復員軍人」というのは、日本では第 2 次世界大戦から戻った軍人を指すが、米国でいま注目されているのは 2001 年に始まったアフガニスタンでの戦争と 03 年から始まったイラク戦争から本国に戻った米兵たちを指す。
22 人という数字は過去 2 カ月の平均で、単純に計算すると 1 年に約 8000 人が自ら命を絶っていることになる。アフガニスタンとイラク両国で戦死した米兵は過去 13 年で約 6800 人なので、これと比べると、どれほど多くの若者が自殺しているかがわかる。
多くの兵士たちは戦地で想像を絶するような試練を経験して帰国する。心的外傷後ストレス障害（PTSD）を患う帰還兵も多い。最近まで高校に通っていた普通の若者までも、従軍により生活環境が一変し、最悪の場合は自殺に追い込まれてしまう。

心を病んでも再びイラクへ

ワシントン州に住んでいたデリック・カークランドさんは高校卒業後、米陸軍に入隊。軍事訓練を受けた後、08 年にイラクに派兵された。
ある日、彼の所属する小隊が、テロリスト殲滅を目的とした掃討作戦をイラクの小村で行うことになった。カークランドさんは他の兵士たちと、ある民家のドアを打ち破った。侵入後、中にいたイラク人男性を撃った。イラク人男性は床に倒れたが、すぐに死亡したわけではない。
小隊長がカークランドさんに命令した。
「そいつの胸を踏みつけろ。そうすれば出血が加速して早く絶命する」
「そんなことしなくとも彼は死にます。早く立ち去りましょう」
反論したものの、カークランドさんは小隊長の命令に従わざるをなかった。
この時の光景が脳裏から消えることはなかった。
その後、米国への帰還を許可されたが、再びイラク行きを命じられる。彼はイラクの戦場で精神を病み、再び米国に戻って陸軍病院にしばらく入院した。その時医師が「自殺する危険性は低いので、小隊に戻るべき」との判断を下し、3 度目のイラク行きとなった。
小隊に戻ると、小隊長が「お前は弱虫だ。くそったれだ」と叱責。カークランドさんはイラクで何度か自殺未遂事件を起こした。それでも任期を終えてワシントン州の自宅に戻った。
（後略）